

CAPNA

キャプナニュースレター55号

中国製冷凍ギョーザの毒物混入事件で、食に対する不信感が高まっています。共働きの核家族が増え、急速に冷凍食品が家庭に入り込んでいく中、ショックを受けた方も多いことでしょう。「何を信じていいかわからない」と恐怖感を持ちすぎると、ストレスをため込む元。「大変な事件だけれど、めったに遭遇するような確率ではない」とバランスよく考えたいものです。

Vol. 55

2008年度CAPNA定時総会のお知らせ

※詳細は次号でお伝えします。

日時 平成20年6月1日(日)1時半～
会場 ウィルあいち
内容 総会、劇「さっちゃんの歌がきこえる」、
会員交流会

オレンジリボン募金のお願い

オレンジリボンキャンペーンにご協力ください。今号では会員のみなさまへピンバッジとリボンを同封しております。ピンバッジの希望寄附金額は300円程度にさせていただきました。また新たに500円のマグカップも登場です。(株)アイトーさんの協力でオフホワイトにオレンジリボンが映えるリサイクル陶土製の素敵なマグカップです。同封の注文票をご利用ください。

子育てフェスタへご参加ください

子育てフェスタのチラシを同封しました。3月1日(土)に名古屋市東区のウィルあいちにて10時より行われます。既に子育て支援関係者等へはチラシを配布しておりますが、どなたさまもどうぞお誘いあわせの上ご参加ください。お待ちしております。

(愛知県児童総合センター委託・地域の子育てサポートフォーラム事業)

ご寄付

次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。(12月-1月分、順不同、敬称略)

【団体】	在日米国商工会議所、名古屋SORAソングクラブ
【個人】	後藤久雄、爾見かね子、早川真理、
【オレンジリボン募金】	高浜市立南中学校、一柳藍、林和宏、山本保、あかつき学園、CAPNA研修企画グループ、愛知県私学家庭科研究会、愛知県立名古屋養護学校、小牧市保健主事研修会、名古屋SORAソングクラブ、徳田恵子、前川一朗、仙田正典、 他 匿名4名

CAPNAニュースレター55号 (隔月刊39号)

2008年2月22日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

内面世界を知る努力を！

発達障害と虐待セミナー 玉井邦夫さんの講演から

1月18日に、愛知県の学校関係者向けの児童虐待防止セミナー「発達障害と虐待」が行われ、山梨大学教育人間科学部准教授の玉井邦夫さんが講演されました。県の委託を受け、CAPNAが運営した事業です。玉井さんの専門は心身障害学。情緒障害児短期治療施設で心理治療士として働かれた後、研究者に転身されました。お子さんにダウン症の障害があり、日本ダウン症協会の理事長も長く務められています。講演のポイントを紹介し、発達障害と虐待の問題を考えます。(岡田桂子、安藤明夫)

8年ほど前、母体血清マーカー検査（胎児の染色体異常が起きる確率を簡便に調べる検査）の問題について、玉井さんにお話をうかがったことがあります。染色体異常の子の命が「選別」の対象になったら、障害児への差別がますます助長されるという思いから、日本ダウン症協会では検査に厳しい規制を求めてきました。「ダウン症の子のいる生活を知らないまま、不幸だと決めつけられるのは嫌です。恐れることではない。けっこうおもしろい人生だと訴えていきたい」と、力強くおっしゃっていたのが印象的でした。

そんな玉井さんがセミナーで強調されたのは「発達障害の子が経験してきた内面世界を少しでも知ること」の大切さでした。

「内面世界」とは難しい言葉ですが、「社会や周囲のできごとを理解する力が普通の子と違う形で成長していく発達障害の子が生まれ出した、非現実的でユニークな世界」と言えるかと思います。玉井さんが紹介されたのは、ある男の子の例。幼稚園のころは関心を持っていた電車などの絵を鉛筆で描いていました。とても緻密で繊細なタッチだったそうです。作文は、原稿用紙の末尾から逆に書いていきます。ユニークなおもしろい文章だったそうです。しかし、成長とともにそうした個性や感性は消えていきました。その後描いた絵は稚拙なものになっていき、家族の顔はすべて目鼻の代わりに数字が付けられていたそうです。両親、弟たちそれぞれが違う数字でした。

また、ミニカーが大好きで、一つ一つに名前をつけ、特徴を一覧表にしていました。でも、一番のお気に入りを入りを母親が壊してしまい、同じ物を購入してきたのに、本人は納得せず、「死んでしまったミニカーが七日後に復活する」という7コママンガを描き上げました。その後は、新しいミニカーを受け入れて、大切に扱ったそうです。

自閉症などの発達障害の子の中には、見たものを記憶する能力が飛び抜けてすぐれている子も多く、本物そっくりの精密な絵を描く子もしばしば見られます。でも、関心が他のことに移れば、絵の内容が変わっていくようです。ミニカーのエピソードは、物が壊れて元に戻られない状態（生物でいえば死）について、発達障害の子が自分なりに解釈し、懸命に納得しようとしている様子がうかがえます。

こうした「内面世界」を親が意識せず、普通の子と違うことを何とか修正しようと考えてばかりいたら、子どもは不安定になり、親はますます慢性的なストレスを抱え込むこも恐れがあります。子どもの行動や言語を親が理解できずにイライラする。子どものできる以上のことを要求する。親子のコミュニケーションが不健康な形になっていく。親が障害に引け目を感じて世間から孤立してしまう。年齢に不相応な未熟

さに腹を立てる。こうしたことが、虐待の問題につながっていきます。「理解しようとする」と大切なのです。内面世界は一人一人が違います。「目指すのは、一致ではなく、共有です」と玉井さんは話されました。

また、虐待防止の体制づくりに関しては

(1) 児童虐待防止法・児童福祉法の改正により、予防を目指し各市町村を基盤にした体制づくりができた。(要保護児童対策地域協議会の設置)

(2) 増え続ける虐待を防止するために「子育て支援」が重要。更に地域の見守りと支援が必要。

(3) 通告で子どもと親の利害が対立するとみるのは誤解。学校側は「通告はすべての人を救うための行動」と思うことが必要。

(4) 軽度発達障害といわれる人は推定63万人とも。発達障害というレッテルを張ることが援助でなく、個人のメカニズムを理解することで援助の工夫や具体的方法も見つけられる。

などの点を指摘されました。

本人や家族が傷つきやすい発達障害

平成17年に施行された発達障害支援法では、発達障害を「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害 その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう」と定義しています。

あいち発達障害支援センターのホームページでは、この定義をもう少しかみ砕いて「多くの人たちと違って、生まれつき脳の働きにユニークさがあります。このため、とても得意なことがあるのに、なんでもないようなことがすごく苦手…」というかたよりとして現れ、誤解されやすく、とても困っている人たちです。しかし、周りの方たちのあたたかい理解と支えがあれば、そのユニークさやかたよりも個性として、ともに元気に生きていける人たちです」と解説しています。以下、同ホームページの解説を抜粋します。

広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害はともに重なり合う部分もあり、知的な遅れがないケース、あるケースにもよっても対応は大きく異なります。愛知県内には、自閉症領域の発達障害の人が約7万人いると推計されています。

原因は、特定されていませんが、遺伝その他の要因が複雑に絡み合っていると考えられています。育て方などが原因となることはありません。

予後は、障害の種類、程度、個人差によって違いがありますが、軽化することはあっても、完全に治ることはありません。一方的に本人に努力を強いて、苦手な所を克服させようとするのは、時に本人を追い詰めてしまい、心や行動にさらなる問題を負わせてしまう危険性があります。個々の特性と発達段階を理解し、それに合わせて環境やかかわり方を工夫して、育て関わることで、暮らしにくさが減り、その人らしく生きていきやすくなります。

発達障害は、周囲から気付かれにくい例も多く、本人が適切な配慮や対応が受けられないままになってしまふことがあります。わがままであるとか、しつけができてない、努力が足りないなど誤解されやすく、本人家族ともに傷つくことがあります。このようなことから、追いつめられ、さらに心や行動に問題(二次障害)を負ってしまうこともあります。知的障害がない場合、受けられるサービスや支援の乏しいのが現状です。育て方や関わり方に難しさがあつたり、周りの人との関係を調整すること、理解してもらおうための努力、将来の不安など、家族の負担にも大きいものがあります。

大成功でした!!!
「子育てを
みんなで楽しく」



「子育てをみんなで楽しく」のコンセプトでコラボした3つの子育て支援NPOである、まめっこ・子ども&まちネット・スコップとCAPNAとはスムーズに連携をすることができました。何度も打ち合わせすることでより良い企画が練れたことや気持ちが高まりました。また、家族と一緒に一日楽しく過ごせるためにと40名以上の託児とプレイルームを設けたことが功を奏したのか、お父さんの参加も多く定員いっぱいの参加で無事終了できたことは我々スタッフの何よりの喜びでした。関係者の皆さま、お手伝いくださいました皆さま、本当にどうもありがとうございました。

日時 平成20年1月20日(日)
会場 刈谷市南部生涯学習
センターたんぼぼ

70分

10:30 オープニング
三河地区の子育て情報の紹介

11:00 劇団うりん公公演
「ドングリ山の
やまんばあさん」

12:00 休憩

13:00 分科会①~④

15:00 修了

主催 愛知県、CAPNA
後援 刈谷市
企画協力

丸山政子(NPO まめっこ)、伊藤一美(NPO 子ども&まちネット)、杉浦登喜子(NPO スコップ)



案内チラシの表紙を飾った「やまんば」のイラストを見て「行ってみたい」と思った子どもたちが大勢いたことでしょう。そしてうりんこ劇場はいつものように舞台と客席が同じ高さで鑑賞できるようになっていて、ライブ感覚なのがまた嬉しかったと思います。TVやDVDとは違う音や照明から、体感できたものはどんなふうにも柔らかな頭に吸収されていったのかな…。また、会場ではこれからママになるマタニティママにも会いました。「自分の住んでいる刈谷でどんな子育て支援があるのを知りたくて」とのことでした。次にお会いするときはファミリーでお会いできますね、楽しみにしていますよ~と笑顔でサヨナラしました。(I)

分科会① 「母となった女性の心と体のセルフケア」

マドレボニープロジェクト代表の吉岡マコさんや産後セルフケアインストラクターの山田千秋、長谷川裕美子さんに学ぶ「子どもの一番身近な大人のロールモデルだからこそ美しい母でいよう」という考え方や、身体を動かすことで産後うつを予防したり、脳の活性化ができるワークがありました。参加した多くの女性の共感を得ることができ、アンケートの回答も一番多く寄せられました。

分科会② 「子どもに生きる力をつけよう」

子ども自身が自分を守る力をつけるためにできることを、防犯の分野からと子どもの気持ちを聞く大切さを説くCAPから学びました。防犯には子どもの安全対策コーディネーターの内野真さん、CAPからはスペシャリストの岩川美智子さんをお招きし、親子で聞き入りました。親だけでなく地域や社会全体の取り組みの重要性、自尊感情の大切さを改めて認識したと好評でした。

分科会③ 「たたくず甘やかさず子育てするためのスキルアップ講座」

スターペアレンティングのファシリテーターである松野敬子さんに親のあり方を学びました。スターペアレンティングとは子育てはスキルであるとし、問題解決のための段階を踏んでいくことでスキルを身につけていくことができるという、アメリカなどで圧倒的な支持を受けている親教育プログラムです。また、CAPNAのチャイルドスターズによる大型絵本も披露され、親の持つインナーチャイルドについて考えました。

分科会④ 「「パパたちのしゃべり場」

ノーバディパーフェクト(完璧な親はいない)のファシリテーターである刀根由紀子さんの司会のもと、就学前の子どもを持つ父親に参加していただきました。子育てで困っていることや夫婦関係など、普段話す機会や相手がなくて一人で抱えているような場合でも、話して安心できることがわかりました、というパパにこちらもホッ!としました。

「ハイ！キャプナホットラインです」と答える前までの緊張感は今でも軽くなっていません。3年半とはいえ、その間の相談体験は一体どこへ？という情けなさですが、受けている私の方には確かなプラスが増えています。それは自分自身の見直しや修正箇所の点検のチャンスです。多くの利用者との出会いは自分の価値観や生き方を問われる場面でもあり、その部分を認識しないで相談室に入ると苦しくなります。この頃電話を受けていてつくづく感じるのは、どうして私たちにはこんなに話せるのに、当事者とは向き合えないのかな、ということ。もちろん力関係に起因するものと理解はできますが、自戒の意味も含めて今更ながら幼い頃からの各人の意思が尊重される環境の大切さを知ることがあります。(Y・)

第7期キャプナ電話相談員養成講座生を募集中！(詳細は裏面をご覧ください)

人と人とのコミュニケーションは、相手に敬意を持って、真剣に向き合うことからスタートすると私は考えています。電話相談は、名前も顔もわからない相手との偶然の出逢いです。お互いの情報は何もないので、コミュニケーションの原点を体験できる貴重な場であり、それゆえに責任の重い活動であるといえるでしょう。しかしそのための勉強は、相談者のためだけでなく私自身にとって全てプラスになっています。そして今では、電話相談だけでなくCAPNAの皆さんと交流する時間が私の大きな支えになっています(みなさんいつもありがとうございます！)。電話相談員になり、私は多くの出逢いを経験できたことを幸せに感じております。もし、少しでも子どもの虐待や、子育て支援について勉強したり、活動したいと考えておられなら、ぜひ電話相談スタッフの養成講座に参加していただきたいです。きっと貴方にもいい出逢いや発見があるはずですよ。「子どもたちの笑顔のために」一緒に活動しましょうよ！

(田辺晴子)

ラジオやテレビなどで人生相談や悩み相談を聞くと、ほとんどの回答者は「…するとよい」「…しなさい」と答えている。以前の私は「悩み」は相談すればすぐ誰かが解決してくれるものだと思っていたし、世間一般でも同様の見方だと思ふ。でも6年前のCAPNAの研修で相談員は「聴くことが仕事」と学んだ。電話相談に入ったばかりの頃は「聴くことが仕事」と心の中で時々確かめながら受話器を取っていた。その当時は我ながらごちない聴き方をしていたように思うが、回数を重ねるに従って利用者にもゆっくと語ってもらえるようになったと感じている。そして私自身も最近は落ち着いて聴けるようになったと思う。「聴くことが仕事」とは「たくさん語っていただけるようにゆっくと聴く」ということなのかな？最近はそのように思っている。(柴田美智子)

電話相談員の皆さんより
電話相談に対する
熱いメッセージを
寄せていただきました。

CAPNAには、
12年という
電話相談の歴史
があります

電話スタッフとして利用者と向き合うとき、「聴くこと」が何よりも大切だと感じています。話の初めは問い合わせや情報収集のような話題であっても、注意深く聴いていくと、利用者が段々に自分の気持ちを話されることがあります。利用者の気持ちを受け止め、寄り添って、ことらも同じ言葉を使って返してきます。《ちゃんと聴いていますよ》《あなたはそういう気持ちなのですね》と深くうなづきながら……。時には、もらい泣きしそうなこともあります。そういう時こそ、電話相談のやりがいを感じますし、この充実感をこれから電話スタッフの仲間となる養成講座生の方にもいづれ味わってほしいと思うのです。(K)

スタートから関わり、現在はバックスタッフとして相談スタッフの役割を担っている。当然のことであるが、ひとつひとつの相談に皆、真摯である。「叩いてしまう」「かわいく思えない」等の訴えに対して「もっと寄り添える聴き方はないだろうか」と悩む相談員と共に悩みながら、(その想いがあれば大丈夫)と心強い確信を抱いている。「相談員としての学びが実生活の中でも活かせた」と心弾む会話をすることも楽しいひとときである。活動を通しての力が公人としての場、私人としての場のエンパワーにつながることを願うものである。相談員に限らず個人個人の力の集合体がCAPNAの凄いいところ！活動に対して、より純粋でありたいとの思いをますます強くしている今日この頃である。(林恵美子)

電話相談を始めた最初の頃は落ちこむこともあり、いろいろわかればわかるほど難しさを感じ、辞めたいと思ったこともあった。でも、利用者の話を「どうしたらいいか」ではなく、利用者にとって「どうなのか」と捉えていく中で、自分なりの関わり方が解っていったような気がする。電話の線だけでつながっている利用者が話をしてゆく中で気づきがあり、自分から答えを引き出していった時、聴かせていただいて利用者が吐露できて軽くなったと言われた時、電話相談をしている意味があると感じる。私はやはり人が好きだから人との関わりの中で電話相談をしていけるのではとも思う。聴くということの難しさ、聴くに始まり聴くに終わる難しさを課題として続けていきたい。続けていけるのは、一人で利用者に向き合うだけでなく、いい仲間との出会いがあるからだと思う。仕事、年齢に関係なく様々な話ができること、心を感じあえる仲間と交流できること、がCAPNAの電話スタッフとして得たものの中でも大きな魅力だと思う。(M)